

安心

不明者搜す訓練 市を挙げて



認知症と思われる人への声のかけ方
 <どんな人に声をかけるか>
 ・夜中や早朝、とぼとぼ歩いている。
 ・寒いのに薄着、暑いのに厚着だったりする。
 ・はだしやスリッパで歩いている。
 ・声をかけても脳目もふらずに歩く。
 ・同じ所をうろうろと何度も歩く。
 <どうやって声をかけるか>
 ・ゆっくり近づき、相手の視野に入つてから話しかける。
 ・急に後ろから声をかけたり、どなるように声をかけたりしない。
 ・「こんにちは」「お暑いですね」などのあいさつから。
 ・「大丈夫ですか」「何かお手伝いしましょうか」と聞く。
 ・返事がなくても矢継ぎ早に質問せず、答えをゆっくり待つ。

(大牟田市の資料をもとに作成)

70歳の認知症の女性で、白がベージュの上着に黒が紺色のズボンを身に着け、傘を杖代わりに持つている。情報は同時に、消防署やタクシー協会、駅、介護施設、公民館、それに事前登録した約4000人の

認知症 明日へ^⑯

地域で支える

午前8時半。福岡県大牟田市役所に、大牟田署から行方不明者の情報が入った。

認知症の人は、慣れた場所でも道に迷うことがある。屋外で困っている人を守るために、住民が連携して探し出す訓練の取り組みが注目されている。訓練を通じて、認知症への理解を深めることで効果も期待されている。

(小山孝、写真も)

メール情報もとに声かけ

認知症の女性(左)に声をかける訓練参加者たち

訓練には認知症への理解を深める効果もある。今年

同じような取り組みは北海道釧路町、群馬県沼田市などでも行われており、自治体の関心は高い。大牟田市の訓練を視察した大阪府高槻市の担当者は「関係者だけでなく、地域住民の力を生かすことが重要だとわかった」と話す。

だが、全国的に見れば取り組む自治体は少数派だ。NPOシルバー総合研究所の調査(09年)では、ネットワークを整備する市町村は28%。このうち、「活動に参画している」と答えたのは約2割だった。

桑野康一常務理事は「ネットワークが形骸化していき自治体も多い。住民に理解してもらうには、啓発を同時に進める必要だ」と指摘している。

住民にもメールで配信されたりする。9月23日に行われた「徘徊SOSネットワーク模擬訓練」の様子で、官民共同で毎年実施され、今年で9回目になる。

午前9時。不明者役の女性が町を歩き始め、住民約1600人が各地で情報とりの女性を捜し始めた。同10時過ぎ、参加者がスーパーの近くにいる女性を見た。声をかけて保護し、警察に連絡して訓練は終わった。

訓練参加者が、不明者役の女性を見つけて声をかけた。寄り添つて歩く人、話が続かない人、「公園で休みませんか」と誘う人も、対応は人それぞれだ。

では、7人の不明者役が町内を歩いた。「どちらへ行くんですか」「柳川です」「バス停まで20分はかかるですよ」

市主婦、小堺良子さん(65)は「実際に声をかけてみないとどう対応すればいいかわからない。一人なら勇気がりますね」と話す。

い場所で不安を感じたりして歩き回ることがある。「徘徊」と呼ばれ、無目的に歩いているように見られがちだが、方向が分からず混乱していたり、実家に帰るつもりだったりと、その人にとっては理由がある。ただ、危険度は高く、警察庁の調査では、2004年に死亡

・行方不明になつた高齢者は約900人。その多くが認知症と見られる。

大牟田市の訓練は、駿馬南校区で行方不明者が亡くなつたことがきっかけで始まつた。当初は同校区だけで行つたが、全市に拡大。

8月、訓練に参加した女子中学生が炎天下で道に迷っていた高齢の女性を見つけ、訓練で学んだ要領を生かして声をかけ、女性は無事に家に帰ることができた。

訓練に関わってきた「大牟田市認知症ケア研究会」の大谷るみ子代表は「捜すだけなら、GPS(全地球測位システム)を使えばいい。なじみの人同士で支え合っていくことが、認知症でも安心して暮らせる町づくりにつながる」と強調する。